

日本財団は、2019年9月に世界9カ国（インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、イギリス、アメリカ、ドイツ、日本の各国17歳1000人）の9000人の若者を対象に、国や社会について「18歳意識調査」を行った。質問事項は「自分は大人だと思うか」「自分は責任ある社会の一員だと思うか」「将来の夢を持っているか」「自分で国や社会を変えられると思うか」「社会課題について周囲の人と積極的に議論しているか」「国の将来についてどう思っているか」「どのようにして国の役に立ちたいか」などである。全ての質問について日本の若者は、他国に比

誰も空気を読んではならぬ

— 18歳意識調査から —

情報広報部副部長

山科 賢児

べて最下位の結果であった。特に「自分は大人だと思ふ29・1%」は中国の1/3、「国や社会を変えられると思ふ18・3%」は断トツの最低、「社会課題について周囲の人と積極的に議論している27・2%」は他国に比べ1/3から1/2の低さ、「国の将来についてどう思うか」については、良くなるが9・6%と最下位、悪くなるは37・6%と上位に位置する。「どのようにして国の役に立ちたいか」については、「きちんと働き納税する」「学業に励み立派な社会人となる」が上位を占め、「国の役に立ちたいと思わない」が14・2%と9カ国中最多であった。調査の結果は日本の若者だけではなく、日

本などの世代にも蔓延している共通の意識であろう。日本はこの30年間で国の勢いはなくなり、貧困化が進んだと言われる。人々の多くは明日への不安のため現実を回避し、国やマスメディアの「日本は素晴らしい」や「経済成長が続いています」の見当違いのメッセージにしがみついたままである。劇作家永井愛は、テレビ局を舞台に報道の独立性を揺るがす圧力と自己規制を描いた「ザ空気」(2017年「二兎社公演」)、国会記者会館の屋上を舞台に官邸記者クラブの記者たちの保身と事実を伝える良心の葛藤を描いた「ザ・空気 ver. 2

行された機関誌「青鞥」の編集部を舞台にした青春群像劇「私たちは何も知らない」を演出した。永井は「世間の同調圧力に負けず、空気を読まない青鞥の人々の姿を、今声上げてきている女性たちと重ねて観てもらえたら」と語っている。1911年(明治44年)「青鞥」の発刊に際し、平塚らいてう(当時25歳)が寄せた「元始、女性は実に太陽であった」は、女性解放運動を象徴する言葉として今も残る金字塔である。「私たちは何も知らない」に登場する「青鞥」編集部の彼女らは空気を読まない。何も知らないからこそ感じるままを行動に移す。

それが物議を醸したそうが知ったことではない。純粹であるが、世間知らず。もし空気を読み現代社会のように忖度していたら、「青鞥」の発刊もその後の女性の人権の獲得も遅れていたはず。実際には彼女らが生きた時代は女性にとって不自由だったが、空気を読まなかったからこそできた偉業である。結果がどうであれ真剣に向き合い話し合い、思うままに行動し、自分に正直に時代をひたむきに生きる。そのような彼女らの生き方は、新たな出発への勇気を我々に与えてくれる。

今、東アジアの若者たちが熱い。香港では、一國二制度をめぐって中国による強権的圧力に抗する粘り強い「香港の自治と民主主義を守る」戦い。先日行われた台湾総統選挙では、若者が海外から帰国してまで投票する「台湾の主権と民主主義を守る」意識の高さと行動力。特筆すべき点は、双方の若者らは多くから認められ支持されていることである。「18歳意識調査」の結果からは、日本の若い世代が圧力に抗うことを恐れ回避し、発言や行動ができずにいる姿が映し出されている。彼らが空気を読まず存分に活躍する機会と、それを後押しする「空気」を作るのは社会の役目だ、と示唆しているようではない。

